慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	トマス・ジェファスンの新しい解釈 : Fawn M. Brodie, Thomas Jefferson, an intimate history, 1974をめぐって
Sub Title	A new interpretation of Thomas Jefferson : in connection with Fawn M. Brodie's Thomas Jefferson, an intimate history, 1974
Author	白井, 厚
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1974
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.67, No.11 (1974. 11) ,p.1138(44)- 1148(54)
JaLC DOI	10.14991/001.19741101-0044
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19741101-0044

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資　料

トマス・ジェファスンの新しい解釈

——Fawn M. Brodie, *Thomas Jefferson, An Intimate History*, 1974 をめぐって——

白　井　　厚

1

とかく悲劇的な人物が目立つアメリカの大統領の中で，トマス・ジェファスンは最も幸福な生涯を送った一人と言えるだろう。ヴァジニア議会の議員，大陸会議代表，「独立宣言」起草者，ヴァジニア州知事，駐仏公使，国務長官，副大統領，大統領，ヴァジニア大学総長と各種の要職を歴任し，83歳の長寿を保って，まさに独立宣言発布50周年記念日の当日，若き日の栄光をしのびまた晩年の教育事業の進展を確認しつつ，静かに世を去った。そして彼は単に政治家であるのみならず，"many-sided" man として有名で，思想家，哲学者，教育者，建築家，弁護士，自然科学者，農学者，言語学者，人類学者とまさにルネサンス的万能人の面目を発揮し，アメリカン・ディモクラスィの源流，建国の偉人，アメリカ最大の啓蒙思想家，信仰の自由の闘士，アメリカ領土拡大の貢献者等々の最大限の讃辞が捧げられてきた。また彼の後世に対する影響は極めて大きく，その思想において，彼が確立した政治制度において，彼が創立した大学において，また彼が残した建築物においても，彼は，単に記念碑的な存在ではなく，現代になお生き続けると言えるだろう。

従って，ジェファスンに関する文献は文字通り枚挙にいとまがない。彼の全集だけをとっても，10巻に及ぶ *The Writings of Thomas Jefferson*, ed. by Paul Leicester Ford (*New York*, 1892～1899)，20巻に及ぶ *The Writings of Thomas Jefferson*, ed. by A. A. Lipscomb and A. E. Bergh (*Washington*, 1903) を経て，現在52巻に及ぶ *The Papers of Thomas Jefferson* (*Princeton*, 1950～) が Princeton 大学の J. P. Boyd の編集によって刊行されつつあり（現在19巻まで出ており，60巻に達するかもしれないと言われる），彼の思想行動の全貌は明らかであるかの如くである。彼は体系的な著書を残さなかったとはいえ，政治家としての公的生涯はもちろん衆目にさらされ，各種の演説，公文書，新聞記事，家事資料などは，彼に関係の深い土地の図書館に残されており，それのみならず18000通に及ぶ彼の手紙，25000通に及ぶ彼宛の手紙，プランテイションの細かい経営記録，農事記録，会計帳の類まで，彼は几帳面に記録し，保存した。それらの中かなりの部分は印刷公刊され，またそのほとんどが，マイクロフィルムなどで利用しうるので，彼の行動を日毎にたどることすら可能である。

加えて，この啓蒙思想家たる大統領は，昨今の大統領とは違って公明正大，すべては白日のもとにあって，逆に言えば彼の思想は神秘的要素を欠き，人間としてもあまりに優等生で面白味がないと思われるかもしれない。しかしジェファスンの思想や行動の中には，ある亀裂，深淵があることは，従来から指摘されてきた。1948年に第1巻を出して以来現在までに5巻の大伝記 *Jefferson and His Time* を出した Dumas Malone (*Dictionary of American Biography* の編集者でヴァジニア大学名誉教授，伝記は全6巻の予定) は，その第1巻の序文において次のように言っている。"若気のいたりで，私はいつの日にか彼（ジェファスン）を完全に理解し，自分のものにするだろうとうぬぼれていた。だが今それをなしとげたとはとても言えないし，私を含めて誰かがそれをやりうるとも思えない"。(Dumas Malone, *Jefferson and his Time*, Vol. I, *Jefferson the Virginian*, 1948, p. vii.) ジェファスンは容易に近づきやすい人物だが，他方においてその内面を知ることは難しい。彼の思想の二面性については，Richard Hofstadter も，革命主義者—奴隷所有者，上流階級と交際—T. Paine や Joel Barlow とも交わる，独立自営農の指導者—大プランターの指導者，世界市民—愛国者・ナショナリスト・強い愛郷心，農業社会の讃美—進歩思想，という矛盾を指摘したし，そのほかにも，彼の思想と実際の政策の間には矛盾があること，感情の表明を避け，多くの家庭的な悲劇はその思想に反映されていないこと，内気な性格で，世に受けいれがたい思想の表明を避けたこと，などがこれまでも言われてきた。そこでジェファスンの思想の矛盾や展開を解明するためには，彼の尨大で平明な文章に記されたことのみならず，思想の下部構造，さらには政治状況，家族・交友関係などの心理的要因も重要視されねばならぬ。従来のジェファスン研究は，尨大な資料にもとづく資料実証主義が主流であるが，資料のみによっては彼の矛盾や二面性を十分解明できなかったことも事実である。

2

こうした従来のジェファスン研究に劇的な挑戦を試みたものが，ここに取り上げる Fawn M. Brodie, *Thomas jefferson, An Intimate History* (New York, 1974) である。

著者はカリフォルニア大学（ロス・アンジェルス）の歴史学教授で，*The Devil Drive, a Life of Sir Richard Burton; Thaddeus Stevens, Scourge of the South; No Man Knows My History, the Life of Joseph Smith the Mormon Prophet.* などの伝記の著者。夫の Bernard Brodie は政治学者である。彼女の説くところを以下に紹介しよう。

これまでのジェファスンの記録には，不思議な欠落がある。従来の歴史家，伝記作家は，崇拝者であろうと批判者であろうと，ジェファスンの文献の山に迷い込み，彼の二重性に困惑し，彼の特殊な才能にふりまわされてきた。彼が自分自身をあまり示さずとらえがたい人物であることはすでに何度か指摘され，のみならず彼の内面生活の秘密は残されたあらゆる種類の資料にうかがわれる。彼は日記を残さなかったし，その思い出の記録も，フランス滞在の5年間でやめている。リンカンやF. ロウザヴェルトと同様に，彼は勝利においても危機においても，内面の感情を公衆に示さなかった。ジェファスンは，一見明白なものの背後に常に陰を宿し，恋愛におけるのみならず，革命，宗教，奴隷，権力についての考えでも，二重性がある。

これまでの研究は，彼の革命思想に対する両親の影響を見なかった。ウォシントンやレーニンやガンディの場合と同じように，ジェファスンの父は早く亡くなっているし（ジェファスン14歳の時），彼は母を嫌っていた。また妻は，ジェファスンのデモクラトとしての面を弱め，トーリ主義者，貴族主義者としての面を助長し，夫の"政治への情熱"を嫌っていた。この妻が，10年の結婚生活ののち早く亡くなった時，彼はまだ39歳の若さであったにも拘らず，彼は以後他の女性に長く心を寄せることはなかった，とこれまでの伝記作家は主張してきた。だが，実際には，かりそめの恋の相手 Rebecca Burwell を含めて，親友で隣人の John Walker の妻 Betsey Walker，イギリスの細密画家 Richard Cosway の不幸な妻 Maria Cosway，ジェファスンの妻の腹違いの妹に当るモンティチェロの女奴隷 Sally Hemings と4人の女性がいた。Betsey と Maria とのロマンスはいつも大したことはないと言われ，Sally との関係は中傷だとして強く否定されてきたのである。なぜか？

ジェファスンと Cosway の関係は，1828年に手紙が発表されてからは明らかであったが，彼の相続人は，彼が Cosway との間に取りかわした25通の手紙を1944年まで隠してきた。その後も，これらの手紙は，ほとんどの学者によって価値が乏しいと見過ごされてきた。だがこれらは，アメリカの大統領の歴史において最もすばらしいラヴ・レターである。

Sally Hemings との関係は，全くのタブーであった。黒人の歴史家のみがこれを事実だと考え，ジェファスンを，奴隷問題に一貫していなかったが故に，英雄とは認めないが，偉大な性的能力の持主と認めたのである。この女奴隷の子孫は，ケンブリッジ，マサチュセッツ，サン・フランシスコに散ったと考えられている。この女奴隷についての記事は，*Richmond Recorder* に1802～3年にスキャンダルとして初めて書かれ，*Federalist* の出版物にも出て政治的な武器とされたが，ジェファスンは直接には何も答えなかった。この問題は，フェデラリストたちが主張するように罪のない奴隷を犠牲者とした堕落のスキャンダルではなくて，38年もの間ジェファスンと女奴隷に大きな幸福をもたらした真剣な愛情であった。彼は，豊かな情熱を持っていたが，白人と黒人の混血を野蛮にも罰した社会のわなにしかけられ，彼の心理的宿命は，禁じられた女性との恋に陥ることであった。欠陥はジェファスンにあるのではなく，彼に秘密を強いた社会にあるのである。

人間の内面生活が，その公的生活に絶えず衝撃を与

えるという前提を認めるなら，ジェファスンの全生涯は明らかとなり，彼の二重性も明らかとなる。彼の英雄としてのイメージは光を失うことなく，その才能も低まらない。そして半透明の影も，なくなるであろう。

3

以上が，本書の中で"半透明の影"と題された序論的第1章の概要である。本書は32章からなり，両親，家族，妻，恋人たち，子供や娘むこ，Hamilton, Burr との関係などを論じ，I女奴隷の息子 Madison Hemings とモンティチェロの奴隷 Israel Jefferson の回想記，II "My Head and My Heart" と題され，prudence と passion が争う Cosway 宛のラヴ・レター，IIIジェファスンの子孫による恋愛関係の否定証言を附録とする。2つの回想記は，1873年に *Pike Country* (Ohio) *Republican* に発表されて以後は最初の公表であると言う。著者によれば，子孫による否認証言は，孫 Thomas Jefferson Randolph から始まった。彼は，Sally Hemings が妊娠した時はジェファスンはモンティチェロにはいなくて，甥の Peter か Samuel Carr が子供たちの父親だと主張した。だがこれは，パリで懐妊した子供のことは否定できないのみならず，ジェファスンの *Farm Book* その他を調べてみれば，ジェファスンが不在でなかったことはすぐわかる。のみならず，懐妊の頃に2人の甥は逆に不在であったことが，ジェファスンと甥たちとの手紙で明白となる，という。

彼女の積極的な主張は，ジェファスンは父を早く失ったため，父に対抗した経験がなく，測量士として地位を築いた父を理想化し，それがアメリカの国民性に対する讃美とつながること，母には敵意を抱きつつも名門出身の母に依存し，それへの反撥が，イギリスの植民地抑圧に対する抵抗とつながること，「イギリス領アメリカの諸権利概観」は母に対する怒りと反抗心の表明であること，10年間の結婚生活は，想像されるほど牧歌的ではなく，妻はジェファスンの政治への情熱に嫉妬していたこと，ジェファスンは妻の死後政治のみに情熱を傾けたのではなく，数人の女性を愛し，特に Sally Hemings との関係は彼の生涯の中心的な事実で，彼女の子供たちの父親であったこと，Sally はフランスへ行った折自由を主張しえたが，ジェファスンの子供をみごもってアメリカに帰国したこと，ジェファスンが奴隷解放に消極的となったのは，もし解放すればヴァジニアの法律によって解放された黒人はヴァジニアを去らねばならなかったためであること，彼の奴隷観は，Sally との関係を抜きにしては理解できないこと，奴隷・黒人・混血などに関する後年の言及は，すべて Sally に対する感情の表現であること，後世の歴史学者は，Sally との関係を，信じたくないためにのみ斥けたこと，などである。

こうした主張を裏付けるものは，ジェファスンの子を自認する前記の Madison Hemings，これを支持するモンティチェロの奴隷 Israel Jefferson の回想記であり，その他には，主に心理分析である。彼女は心理学者 Erik Erikson の影響を受け，資料の行間に心理分析を加える psychobiography の方法を用い，性を中心に，ジェファスンのあいまいな奴隷観などに合理的な解決の鍵を与えようとした。例えば，ジェファスンの旅日記 ("Notes of a Tour through Holland and the Rhine Valley," *Papers, Boyd*, XIII, 8-33.) において，フランスの田舎の状景を描くのに "mulatto" という言葉を25ページの中に8回使っているが，これは Sally への強い関心を示すと言い，また infinitely the happier, totally absorbed, ardor, infinite appetite などの用語は，sex を愛する人の強い言葉だと言う。従来の男性史家とは異なり，彼女は，女性特有の眼をもってジェファスンの感情の起伏を読み取ろうとした。

4

こうした問題について，従来の伝記研究はどのように扱ってきたのか。問題の中心である Sally との関係についてみてみよう。

まず，現在ヴァジニア大学で Thomas Jefferson professor の地位にある Merril D. Peterson の，*The Jefferson Image in the American Mind*, 1960 は，次のように説明している。

この話の始まりはあいまいである。フェデラリストたちは，1800年の激しいキャンペインでそれを口にし始めたが，1802年に James T. Callender が大統領に対する中傷文の中にそれを加えるまでは，公然とは知られなかった。……J. Q. Adams の軽卒な詩が1828年に彼の論敵によって復活された。……この話は，尊敬されたイギリスの詩人 Thomas Moore の書においてもまた含まれていた。……この話は党利党略のために用いられることがなくなった後に，奴隷廃止論者たちによって再び語られた。……その代表例は，1838年にニュー・ヨークの Levi Gaylord が語ったものである。

彼は，ある南部紳士の口から，ニュー・オーリアンズでトマス・ジェファスンの娘が1000ドルで売られたのをその目で見たということを聞いた。……数年後に，黒人作家で奴隷制廃止論者の William Wells Brown は *Liberator* の中に「ジェファスンの娘」という匿名の詩を見つけ，……彼が編集していた奴隷反対歌集に加えた。……偉大な黒人指導者 Frederick Douglas は，ジェファスンの子孫に更に一世代を加えた。孫娘がリベリアの植民地にいた！……Theodore Parker はジェファスンを歴史的に描いた中で，ジェファスンは自分の奴隷の父親だという告発には十分根拠がある，と言った。……イギリス人のアメリカ論者たちは，19世紀の第2四半期におけるこの伝説の復活に貢献した。……Trollope 夫人は，1832年の辛らつな *The Domestic Manners of the American* によってその代表となった。……この伝説に尾ひれをつけそれを支持した旅行者の間には，Marryat 大尉，Thomas Hamilton, Felton 夫人，E. S. Abdy がいる。その意図は常に，デモクラスィ道徳の空しさを示すためか，奴隷制の恐しさを示すためであった。……

この伝説を証明するような証拠は多くないが，それを積極的に打ち消すものもなかった。ジェファスン自身は，かつて混血児の父であることを否認したと主張されたとはいえ，これを否定しなかった。彼の公表された著述にも，多勢の人のための報告書にも，資料にも，黒人女性との関係を示唆するものは何もなかった。また初期の伝記作家も，彼に最も厳しい批判者ですらも，このありふれた報道に注目しなかった。最初にそれを問題にしたのは James Parton で，1874年に書いた伝記においてである。Hemings という少し黒人の血が交った家族がモンティチェロで働いていて，ジェファスンが解放した5人の奴隷の中3人がその名を持っていたことは，ずっと知られていた。そこから，Hemings は（奴隷ととどまっていた他のものについてはおそらく何も言われずに），ジェファスンと Sally の子供たちだと推断された。この推断は，長年にわたってジェファスンの奴隷監督であった Edmund Bacon によって，1862年に公表された回想記によって斥けられた。"Hemings 兄弟姉妹は，老 Wayles 氏の子供だと人びとは言った"。とモンティチェロの奴隷 Isaac Jefferson は，1840年代に書きとめ公表されなかった回想の中で報告した。最近の学者は，この判断を支持する方に向かっている。John Wayles はジェファスンの義父であった。Isaac の記すところによれば，"Black Sal は非常に美しく，長い毛を背中にたらし" Wayles の遺産の一部としてモンティチェロに連れてこられ，Wayles の子供の1人であった。歴史家の Hildreth と H. W. Bartlett は共に1856年に彼女の真の家系を認めた。H. W. Bartlett の書いたものによれば，"Black Sal は，妻と血のつながった妾であった。" ジェファスンが，モンティチェロにおける彼の奴隷の何人かと混血の子供たちに対してなぜ特に目をかけたかを説明するのに役立ったはずのこの事実が，その代りにあの伝説を強めるのに用いられた。……

今に伝わる話の中で，最も信頼の置けるものは，オハイオ州 Pee Pee の Madison Hemings の回想記で，1873年3月13日に地方紙 *Pike County Republican* に発表された。新聞編集者に語った Madison の生涯の話は，家で語り伝わっただけである。彼の祖母 Elizabeth Hemings は，イギリス船長と ウィリアムスバーグの John Wayles の奴隷の娘だと彼は言った。妻が死ぬと Wayles は成長した Elizabeth を妾とし，6人の子供をつくった。Wayles が死ぬと，母と子供たちはジェファスンの奴隷としてモンティチェロへ行った。明らかに Elizabeth の5番目の子供で次女の Sally は，ジェファスンの下の娘 Polly について，1787年にフランスへ行った。Madison は，その時彼女は，ジェファスンの上の娘 Martha と同じ15歳位だと考えている。パリで，Sally はジェファスンの妾となった。……子供の Beverly と Harriet は白人と結婚し，ウォシントンで白人の家庭を育てた。Eston は黒人の女性と結婚し，まずオハイオへ，ついでウィスコンシンへ移った。Madison 自身は，……後にはオハイオの Pike Country へ行った。……彼の母については，"部屋と衣類を整理し，われわれ子供たちの世話をし，縫物などのような軽い仕事をするのが，私が記憶する限り，父の死に至るまでの彼女の生涯における義務であった"。この回想は，ジェファスンの家庭生活とモンティチェロの奴隷について学者が集めた資料と実によく符合している。しかし，Sally がジェファスンの妾であったとか Madison が息子であったということは証明していない。父子関係の証明は，もちろん世の中で最も難しいことの一つである。この場合も多分証明は決してされないだろう。真面目なジェファスン学者はこの関係を信じるとは誰も言わなかったにもかかわらず，この伝説は続いている。これは，Arthur Calhoun の *Social History of the American Family* にも，W.E.B. DuBois の *Black Reconstruction* にも，J. C. Furnas の *Goodbye*

to Uncle Tom にも，その他の重要な書物にも，真実かもしくは真実だろうと記録されている。1954年には，Ebony という雑誌が，ジェファスンの子孫たちの写真を並べた。……"4世代のうちに，これら誇り高きネグロの子孫たちは……モンティチェロの白大理石の輝きから'ネグロ・ゲトウ'へと，先祖がその発見に尽力したディモクラスィの中で，長い信じられぬような旅をしたのだ"……この混血伝説が起り広がるのは，主に3つの要素のゆえである。第1に政治的要素：フェデラリストたちの敵意，アフリカのハレムを暴露することによって彼を陥れようという Callender がたきつけた政敵たちの望み，そして後には，その英雄を台座から転落させることによってアメリカのディモクラスィの威信を低めようとするイギリスの批評家たちの宣伝活動。第2に奴隷制度：少しばかり誇りを持ちたいというニーグロウの切なる望みと，白人を困らせるための巧妙な方法，Jones の子孫というよりはジェファスンの子孫ということで少しでも良い値をつけようという奴隷商人と競売人のずるさ，混血という社会的事実とその道徳問題としての魅力，そして特に建国の父たちの中で罪を犯したことを示す価値があるのはジェファスンだけだという奴隷廃止論者たちの論理。第3にジェファスン自身の個人的な習慣と履歴をめぐるもの：妻の早死，Walker 夫人（アルブマールにおける隣家の妻）との短い恋愛，ある奴隷たちに対する特別な親切を含めて，ニーグロウに対する彼の大きな関心，想像力を働かせれば，"Black Sal" 関係の好奇心をそそりえたような問題。ジェファスンの家庭生活についての圧倒的な証拠はこの伝説を論破したとはいえ，彼の生活のこの面は，南北戦争前には良く知られていなかった。この伝説はフェデラリストたちがいなければ生まれなかったろう。それは，奴隷制廃止論者か，考えられるところでは，イギリスの批評家たちがいなければ，復活しなかったろう。そして，ジェファスン自身の経歴と少数のニーグロウの回想を除けばそれを支えるものはほとんどなかったので，それはジェファスン像の漠たる奥に消えて行った。(pp. 182-7.)

以上のように，Peterson はこの"伝説"をフェデラリスト，奴隷制廃止論者，イギリスの批評家の3者によるものとし，これを証明する資料も否定する資料も少いと言って注意深く断定を避けてはいるが，真面目なジェファスン学者はこれを信じなかったと述べ，南北戦後に知られるようになった彼の家庭生活資料はこの"伝説"を論破していると判断して，諸般の状況からこれを否定している。

彼のもう一冊の伝記 *Thomas Jefferson and New Nation, a Biography*, 1970. においてもこの論調は変らず，次のように述べられている。

大抵の伝説と同じように，これもつぎはぎでつくられたものである。証拠はほとんど状況証拠で，およそ決定的ではなく，もしジェファスンがモンティチェロで人知れずその性格を約変させることができるのでなければ，黒人との混血関係にかかわり合った彼を想像することは難しい。このような人種の混血，主人と奴隷との関係におけるこのような無慈悲な搾取は，彼の全存在に反した。これは歴史的には重要でないが，Sally の子の父は Peter Carr だというのが最も妥当な推測だろう。……この状況は，もしそうだとすれば，Hemings の血統の真相から彼自身の家族を守りたいという願い——彼にとって微妙な点——と共に，この問題についてなぜジェファスンが堅く唇をとざしていたかを説明するだろう。ジェファスンは，Callender がこの問題を公表した時のみならず，生涯これについては沈黙を守ったのである。彼の友人は憤慨してこれを否定したが，スキャンダルを広げただけだった。……(p. 707)

こうして Sally の相手は Peter Carr という説に組みし，中傷した Callender はフェデラリストの中でも信用を失ったと断罪している。

5

先に触れた Dumas Malone は，1948年以来ジェファスンの伝記に取りかかり，すでに5巻を出して標準的な伝記として広く推賞され，現在その完結篇の筆を取っているが，その中における彼の考えを見よう。*Jefferson and his Time*, vol. IV, *Jefferson the President, First Term, 1801~1805*, 1970 において，彼は Callender の批判について次のように言う。

この時ジェファスンは60歳に近いこと，またこのジャーナリスティックな批判者はモンティチェロへ行ったことがないことが注意されよう。情報源を何ら示すことなく，Callender は，自分の言っていることはよく知られていると主張した。……われわれの時代においては，当面の問題は，彼がこの話の中で述べたことに何か真実性があるかということであろう。これには三つの答えが与えられうる。(1)この告発は，先ず第一に，非良心的な人間の復讐のペンから生まれ，敵意のうちに広められたものだから疑わしい。(2)それは証明されえないし，言われた事実のいくつかは明らかに誤っている。(3)それらは，ジェファスンのような道徳規準と行動習慣を持った人間にあっては事実上考えられないので，それは明らかにしっくりしない。こう言ったからとて，彼は石膏づくりの聖人で誤りを犯すことはないなどと言うつもりはない。だが彼の主な欠点は，こういう類いのことではなかった。彼は時には品位を落としたこともあろうが——沢山の男性と同じように——，この潔癖な紳士が，亡き妻の思い出と，娘や孫たちの幸福に献身しすぎるほどでありながら，卑しい関係を生涯保ちえたとは，事実上考えがたい。そのような関係があれば，彼の家族は必ずやかぎつけたことだろう。これは，この節制の堅い人間が，長い間秘密の酔漢であったと告発するのと同じ位，ばかげている。(pp. 212~214)

彼自身は，引退の後に，政敵による中傷に対しては彼の生活ぶりによってのみ答えるべきでそれ以外に答えることを望まない，と言った。"もし私が彼らの偽りに反論するために筆をとるほど堕落したとするなら，私は自分自身を半ば有罪だと考えるべきだろう"と彼は言った。(Thomas Jefferson to Dr. George Logan, June 20, 1816, (Ford, X, 27)) これは，彼の公的な行動についての攻撃に関して，ほとんど変らぬ彼の方策であった。彼は，彼の宗教と道徳に対する攻撃を，攻撃者は適切さを欠くために目的を遂げられないだろうと信じて，公衆の善意に頼り，無視した。彼と彼の奴隷 Sally Hemings の関係について彼が特に触れたような記録は，個人的なものの中にもないようである。(pp. 212~215)

また Malone は，同書に「混血伝説」という附録を付け，この伝説普及についての Peterson の3要素説のうち，奴隷制度，特に，自由の傑出した闘士であるジェファスン自身が奴隷制度によってけがされ犠牲となったということを示すことによって，奴隷制度の不信を増そうという Abolitionists の努力について取り上げ，現代においてこの混血物語を復活させる人びとは一世紀前の Abolitionists たちの主張と実によく似ていると言う。彼は，ジェファスンとモンティチェロの奴隷についての資料として，*Thomas Jefferson's Farm Book*, ed. by E. M. Betts, 1953, Isaac Jefferson, *Memoirs of a Monticello Slave*, 1951. H. W. Pierson, *Jefferson at Monticello* 1862. を挙げ，Sally の母 Betty Hemings が John Wayles の妾だというのも口伝にすぎないとし，Sally の子供たちの父を定めるのは全く不可能だと言いつつも，ジェファスンの孫 Thomas Jefferson Randolph の説，つまり父はジェファスンでは全くなく，甥 Peter Carr だという説を紹介している。また Sally の子供の一人は大統領の子であると自認したが，それは母に教えられたもので，この母の虚栄心にもとづく，とかなり否定的である。Malone にとっては，ジェファスンはやはり崇高な人格者であり，混血伝説は，政敵の悪意や女の虚栄心などによって広められたということになろう。

6

こうして，ジェファスンと Sally の関係は，従来の権威ある歴史家たちによって，証明されえないものとして否定され，その関心の外に置かれてきた。これに対して Brodie は，このタブーに挑戦し，従来の歴史家が head の勝利として描いた公認のジェファスン像を，heart の勝利として恋の冒険者に転換しようとするものであった。そのためにこの書はたちまち評判を得て，連続ベストセラーとなり，Book-of-the-Month Club の選定書に選ばれ，"洞察を加え現代心理学の方法を適用して，ジェファスンをリアルに，人間的に，誤りを犯すものとして描き，それによって彼の知的な業績と性格を一層英雄的なものとし，彼のゆううつな内攻的な特色を，彼の偉大さを補うものとして理解せしめた"。(Alan Green, *Saturday Review/World*), "偉大な洞察と共感と筆致をもって描いた桁はずれの人間ドラマ" (Page Smith), "head と heart を兼ね備えた最も知的な大統領にふさわしい全身像" (John Barkham, *John Barkham Reviews*) などという賞讃が寄せられた。

だが他方で，性関係を中心としたフロイド的心理分析に対しては，風当りも強い。*The New York Times Book Review* (April 7) の Alfred Kazin は，"もし君が秘密を守りたいなら，大統領に選ばれるな"と忠告し，この書は魅力的な立派なものだが，著者はジェファスンの sensitivities にのみ重きを置きすぎて，恋愛を求めるよりも "intimate" なはずの哲学の compulsions を軽視していることのみ不満であると述べている。また，Sally が何を考えていたかについては，ジェファスンが子供たちを解放してくれること願ったということ以外には何も述べていない。また，著者は，ジェファスンの奴隷所有者としての経済的な苦しさのみならず心理的な苦しさについて見るが，ジェファスンの奴

隷問題・黒人問題についての“矛盾”に焦点をあてないことを不満とする。*The New Republic* (April 13) の Max M. Mintz は，彼女の心理学的分析をとり上げ，“われわれが結論しうるのは，そういうことがあったかもしれぬ，ということだけだ”と言って，これだけの根拠だけからなら，反対の仮説をも主張しうるとし，ジェファスンは父を憎んでいたがゆえに“anti-authority” complex を抱き国王にも Federalists にも対立したのだという Harry Elmer Barnes の説を紹介している。*Newsweek* (April 15) において Walter Clemons は，彼女の心理学的な考察のいくつかは甚だ疑わしい guesswork で Freud 的な愚かさを繰り返しているが，いくつかは素晴らしく独創的で，また感動的でもあると言う。ヴァジニア大学の Robert Rutland (James Madison Papers の編集者) は，*Press Enterprize* (April 28) で，この書において新しい点は，著者のような学識をもった歴史家が，ジェファスンが女奴隷の少なくとも５人の子の父親だと無鉄砲にも断定したことだけだ，という。彼は，Madison Hemings の思い出のような三次資料を取り入れ Coolidge-Randolph letters を拒むごとき方法を嘆き，彼女は第六感を働かせ，ドラマを組み立てる小説家のセンスを持っていると皮肉る。最も辛らつなのは，*New York Review of Books* (April 18) の Garry Wills で，著者の勤勉と無知の結合が，この書を非凡なものとしていると言う。著者は18世紀のプランテイションの条件，政治思想，言葉の使い方，科学上のカテゴリィについて全く無知で，200年前の語法について OED の存在を知らぬとこきおろし，hint-and-run method と非難する。旅行記の中で“mulatto”という語を８回使ったという点についても，OED によれば，これは特に18世紀アメリカ的な用法で，黄褐色の土の色にジェファスンが注目して用いたものであり，red を７回使ったのと選ぶところはなく，オランダ旅行の時と頻度が違うのは，フランスと土が違うからだと言う。性と恋愛にもとづく彼女の研究方法は，Hollywood fan magazines からの借りものだとまで断罪している。*Christian Science Monitor* (May 21) の Henry Wilkinson Bragdon も，著者はジェファスンの書いた文章の隠れた意味を探るが，時に18世紀の語法をこっけいにも誤解していると言い，また彼女の得意の方法は臆測で，“one cannot know, although one may suspect” “it is likely that” “it must have filled her with horror” “certain passages suggest” などの言葉でおおわれ，歴史家として納得できないと批判する。だがこうした欠点にもかかわらず，この書は読む価値があり，ジェファスンの心理を探る彼女の試みを割引きして考えれば，特にモンティチェロにおけるジェファスンの生活は豊富な資料で描かれていると賞め，“禁欲的で知的で冷静でエレガントな”という一般のジェファスン像から彼を救い出したことを評価し，現在の防腐剤入りのモンティチェロに関する彼女の次の言葉を引用している。“ジェファスンが愛した鼻息の荒い馬も，肥料の匂いも，ワイン・グラスの鳴る音も，子供の叫び声も，そこにはない。やきもちやきのほれっぽい女性も，酔っぱらいや意地悪の親類も，気狂い沙汰やけんかのきざしもない。この小高い丘からは，奴隷小屋が取り除かれ，その本質的な人間性もまた取り除かれている”。（これはモンティチェロを“a fascinating museum, a shrine to Jefferson's memory” と讃えた Merrill Peterson に対する皮肉であって，“The modern Monticello is indeed like ‘the Jefferson image in the American mind.” だと言う）。

特に奴隷問題については，Garry Wills が，*Detroit Free Press* にも書き，Sally との関係の可能性は，もっと真面目な歴史家たちによってすでに認められてきたのだが，それだけのことであり，奴隷に対するジェファスンの態度はそれによって動揺してはいないという。Wills によれば，ジェファスンは非常に早くから奴隷問題について書き，それは一貫していたが，「ヴァジニア覚え書」では２前提から出発した。すなわち第一に奴隷制度は悪であるが，細切れにもしくはやたらに奴隷を解放してならぬのであって，生活の手段を与えねばならぬし，社会を転倒しようとする者も解放されえない。(彼はヴァジニアで解放された奴隷の数を抑える厳しい法律を支持した)。第二に，黒人奴隷と白人は，最も重要な能力，道徳感，自治政府による生命・自由・幸福追求の権利においては平等だとしつつも，文化的，歴史的差違を感じ，自治政府において黒人と白人が協力することを斥けた。黒人は遠くに分離して自治政府を持った国民となるべきだとしたのである。以上の２前提から，彼の解放計画は，(1)ある時期以後に生まれた奴隷をすべて解放する，(2)自治能力がつくまで公費で教育する，(3)成年に達したら国外に送り出す，(4)代りに白人労働者を移民させる，というものであり，この計画は全体として進められなければならなかった。ジェファスンは，この計画の一環としてでなければ，自分の奴隷の解放を考えたことはない。彼より博愛主義的な人もいたわけだが，彼は彼の時代においては冷静に科学的に考えたのである。Brodie はこのことに気がつかず，彼女の説は人を誤らせる，と批判する。Wills は，Sally との関係を認めつつもジェファスンの奴隷観は一貫していたと主張するもので，それは一つの解釈だが，ジェファスンの白人優越思想，黒人との混血に対する恐怖が，Sally との関係があっても全く影響を受けなかったとするのはやはり無理があろう。

Wills よりも若い研究者 Steven H. Hochman は，*West Virginia History* に次のように書いている。Brodie 以前の歴史家が性の問題を無視したわけではないが，ジェファスンは特に自制心の強い人で心の奥を人に示さなかったので，それをあまり追究しなかった。ジェファスンは貞操を特に美徳とは考えなかったが，Brodie の言うほど性にとりつかれたわけではない。モンティチェロの混血の子供たちについてはジェファスンの甥がその父だと認めたという孫の証言があるし，家庭を大事にし人格者であったジェファスンが妾や私生児を持っていたということは考え難い。だが Winthrop Jordan も数年前に述べたように，その可能性はあるわけである。しかし Brodie が加えた証拠は疑わしく，彼女の解釈は空想的である。彼女の誤解の多くは，彼女が彼の時代，特に政治や学問の分野に対する無知にもとづく。彼女は，性や人種問題や心理など現代人には関心の強い問題によってジェファスンを当世向きに描くことに夢中になり，彼の時代において描くことに失敗した。

7

また前記の Dumas Malone は，*New York Times* (May 18) に“Jefferson's Private Life” として，ジェファスンの孫 Ellen Randolph Coolidge が1858年に夫に宛てて書いた手紙を公表した。その前書きで，この内容は Sally Hemings の話に触れており，この話は最近復活され，証拠がないのに本当だと考えられている，と述べている。

Ellen Randolph は，次のように記している。

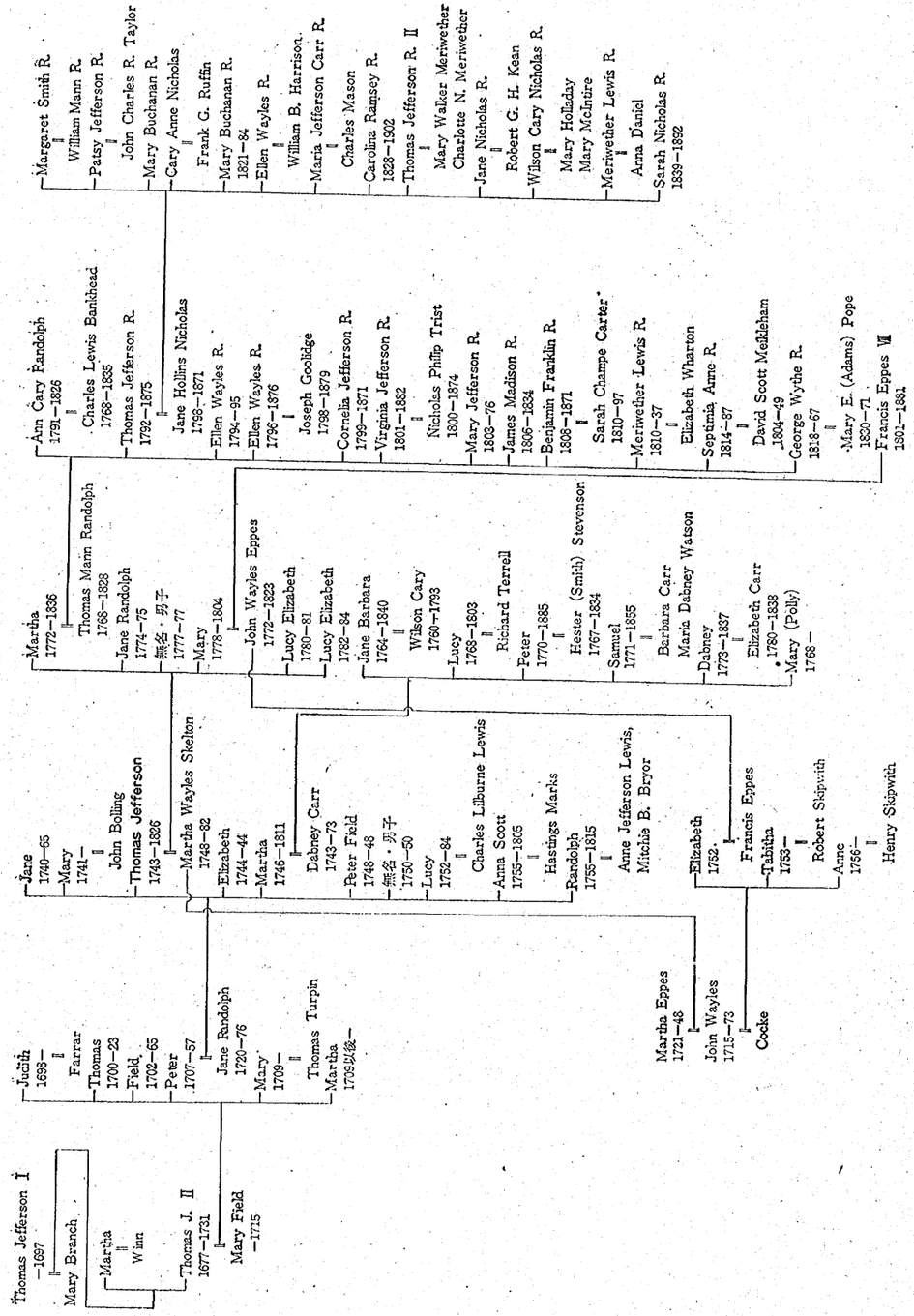
ネガティヴの証明は難しいので，ジェファスンには黒人の妾や黒人の子供がいたとか，この子供たちが奴隷に売られたことを，否定する証拠を示すのは不可能である。だが後者については，そんなひどいことをするわけはないし，慈悲深い人柄でとりわけ親切な主人として知られているジェファスン氏の人柄と矛盾する。奴隷の気持と福祉にいつも最も心をつかっていた彼が，自分の子供だけを残酷に扱って，解放することだってできたのに遠い市場に売るだろうか？　彼は何人かの奴隷を解放することとし，遺言執行人に，解放後もヴァジニアにいられる許可を州議会に請願するよう指示した。解放された何人かは今ここにいるのである。白人社会に入れるほど白い奴隷はプランテイションから静かに去らせるのが，彼の主義であった。それは“逃亡”と呼ばれたが，連れ戻されることはなかった。私は４人の例を知っており，彼らは歩いて去ってしまった。その行く先はよくわかっていたが，そのままだった。——白人社会に入れるほど白かったからである。……ジェファスンは青年男女さまざまな年齢の孫という大家族を持っていた。彼はモンティチェロにいた時は，特に晩年の17年間は，これら若い人たちに囲まれ，彼らと自由にだんらんしていた。彼の不品行が家族に怪しまれないことなどあろうか？……私の兄はかかる中傷を怒って，祖父の生活の潔白を疑わせるようなものは何一つ見も聞きもしなかったときっぱり断言している。彼の部屋には家族に全くわからぬような入口などはない。……ジェファスンのように尊敬すべき家庭的な性格を持ち，娘とその子供たちのことを考え，彼らと接することを好み，あれほどの優しい思いやりとこまやかさで彼らと接し，あらゆる点に気をくばった人が，彼らの目前で混血の子供を育てたり家庭内でみだらな情事をやりたがるだろうか，を公正な人に判断してもらいたい。……モンティチェロの家は長い間建築が続けられ，主にアイアランド人が働いた。彼らは黒人の女性との間に子供を持ったことで知られている。しかしこの女性たちは，その子供たちは自分の主人の子だと思われるのをとても喜んだ。……混血女性を追いかける遊び人たちも近隣におり，子供ができてもその認知を渋った。……“dusky Sally” として知られている女性はあまり評判がよくなく，ジェファスン氏の近親の妾であって，その子供たちがこの近親の子であることはほとんど間違いない。彼らは皆きれいで，祖父の死後皆解放されたか，生前に離れていくことができた。……主人の名前をつけるという南部の奴隷の習慣が，誤解を与えたもう一つの原因である。ジェファスン氏の奴隷が，その死後に売られた時に彼の名をつけたことは疑いない。ジェファスン氏の奴隷ではなかった一人の非常に評判の悪い男が，彼の名をつけて自分は彼の息子だと主張した。彼は烏のように真黒で，ジェファスン氏が不在の折か何かに生まれ，彼の主張が正しいはずはないのである。……

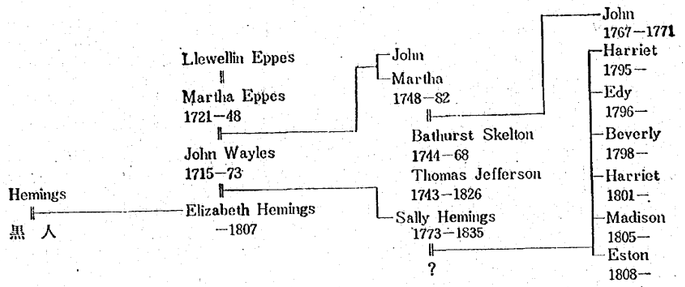
これは Sally の問題を扱った珍しい手紙で，孫の立場として祖父の素行を擁護し，Sally の子の父は Samuel Carr か Peter Carr という説を支持している。ただし，50年もたった後の弁護論ということに難があろう。それに対して，Brodie は，同じ *New York Times* (June 13) に一文を寄せ，ジェファスンは *Farm Book* に記された Sally の子が生まれた9月前にはモンティチェロにいたこと，Peter と Samuel は妻帯者で農園を経営していたこと，二人ともジェファスンを擁護したことはなく，またジェファスンは甥を非難したこともないこと，Sally の長男の消息は不明なこと，ランドルフ家の子供たちに囲まれていたというが，この子供たちは夏はモンティチェロで過ごしたものの，1809年になってそこに引越したのだし，その時は Sally の最後の子供が生まれたあとだった，と述べた。こうして，ジェファスンの人格面を中心に家族の証言をもって Sally との関係を否定する Malone と，あくまでもその可能性を主張する Brodie は，平行線のままである。

8

Cornell 大学歴史学教授 Michael Kammen も，*Washington Post* (July 7) に本書の書評を載せ，ジェファスンについての文献は洪水のように出ているが，彼に対する評価は3つに分かれているとして，(1)高級祭司の内輪な集団で，ジェファスンの名声に気をつかう人たち——Julian P. Boyd, Dumas Malone, Merrill Peterson, (2)市民的自由の濫用，政治的な矛盾，女性関係などジェファスンのすべてを知ろうとする人たち——Leonard Levy, Gore Vidal, Fawn M. Brodie, Winthrop Jordan, (3)アメリカの政治，思想，文化を理解するのにジェファスンは重要だと考え，彼を讃えはするが完全な侍祭とはならぬ人たち——Daniel Boorstin, Henry Steele Commager, Noble Cunningham, Richard Ellis, Erik Erikson, Adrienne Koch, Douglas Adair の三つに分類した。建国の父でアメリカ最大の啓蒙思想家ということになると，その研究者たちには一方に若干の神格化傾向が生まれ，他方にはそれへの挑戦が生じるので，さらにこうした歴史家や，以上に紹介した書評の筆者たちの立場，階級，人種，信仰などを考えると誠に興味深いものがある。だがここでは，さし当り Brodie の問題提起の波紋を追うにとどめよう。

ジェファスンの父は40人ほどの奴隷を持っていたと推定され，3人の監督によってプランテイションを経営していたが，ジェファスンは1774年妻の父が亡くなった時，135人の奴隷を相続し，1万エーカーの土地と共に，大奴隷所有者となった。借金に苦しみつつ亡くなった時にも，60人の奴隷を持っていたと言われる。この奴隷は，彼の社会的地位を高めるためにも，また彼の農場を維持するためにも，必要だったのである。しかし彼は奴隷制には批判的で，「独立宣言」はもちろん人間の平等性，生得権（生命・自由・幸福の追求）を高らかにうたい，その草案には，イギリス国王がアフリカ人の生命と自由の権利をけがし，奴隷貿易禁止の試みに対して拒否権を濫用したことを攻撃した（この部分はジョージア代表の要求により削除）。だが1779年6月に，ペンドルトン，ウイスと協力して作成した「ヴァジニア法改正委員報告」においては，奴隷輸入の禁止を定めただけで，現在の奴隷の解放については触れず，むしろ奴隷が通行証を持たず外出すること，武器を持つこと，暴動や不法集会を開くことなどを厳しく禁じている。これは，彼の平等思想は不徹底で，黒人に対しては強い人種的偏見を持っていたこと，プランテイション経営には奴隷が不可欠であったこと，特に彼の後半生においてヴァジニアの支配階級は，彼をも含めて，奴隷の反乱を強く恐れるようになったことによるだろう。彼は自分の奴隷を未熟なものと考えて，彼が擁護した権利を与えることを拒んだのである。彼は，もちろん制度としての奴隷制には反対だが，せいぜいこれに技術を習得させて漸次的に解放し，奴隷州だけの負担でアフリカの海岸に送り返すことや，アメリカの中で隔離しておくことを考えた。それが最もよく表れているのは，1781～3年に書かれた「ヴァジニア覚え書」で，その質問14において，"黒人の表情を支配しているあの永遠の単調さ，あらゆる感情を蔽いかくしているあの黒い不動のヴェールよりも，白人のように赤と白がみごとに混りあい，皮膚の色にさす紅潮の程度によってあらゆる感情が表現される方が，より一層好ましくはないだろうか。……また，オランウータンが自分自身の種族のメスよりも黒人の女性の方を好むのとまったく同様に黒人が白人をより好むことからわかる通り，黒人自身も白人の方が美しいと判断していること。……彼らは非常に強い不愉快な臭いをもっている。……彼らの場合愛情とは，情操と感動がやさしく微妙に混りあったものというよりは，強い欲望であるようにみえる。……推理力では，ユークリッドの研究を追ったり，理解したりすることのできるものはほとんどいないだろうから，白人に比べてかなり劣っ





ており，想像力は鈍く，下品で，異常であると思われる。……黒人の場合には，平凡な物語の水準を越えるような思想を口にした例を，私はまだ一度も見つけることができなかったし，絵画や彫刻ではほんの初歩的なものさえも見たことがない。……この不幸な皮膚の色の違い，そしておそらくは能力の違いは，これらの人びとを解放しようとする時の強力な障害である。彼らの立場を弁護する人の多くは，一方で人間性の自由を擁護したいと望みながら，同時に他方では人間の高貴さと美しさを守りたいという気持も強いのである。……奴隷たちは，解放された暁には，血の交わりのできない所へ移されるべきなのである”（*Notes on Virginia*, edited by William Peden, University of North Carolina Press, 1955, pp. 138～143. 中尾健一訳，249～260ページ）。こうした徹底した白人優越思想，人種的偏見は，当時としてはもちろん異とするに足りない。だが，奴隷の漸次的解放を計画していたとは言いながらも，ジェファスンは，奴隷解放のための実際的な政策をほとんど何も行なっていないので，「独立宣言」と実際の政策との矛盾は，やはり問題とすべきであろう。

ジェファスンの人格は，黒人奴隷との38年にわたる長い関係・7人の私生児という情事の秘密とは両立しがたいように思われてきた。Brodie も特に新資料を発見したわけではないし，心理分析による推論の域を出るものではない。しかしこの書の出現が，従来正統史学が否定してきたことを改めて大きな問題として提起し，その可能性を強めたことは事実である。

最終的な判断は誰も下しえぬ状況であるが，事実は，(1)Sally との関係は全くなかった，(2)その関係は一時的なものに過ぎなかった，(3)38年間続き，その間に何人かの子供が生まれた。のいずれかである。(1)の場合は，ジェファスンに寄せるBrodieの尊敬にも拘らず，彼女は事実無根の中傷を再現させたことになり，確実な資料をもってのみ語るという史学の王道を踏み外した点，および当時の社会的背景に関する理解が浅薄であるという点が，非難されよう。だがそれでも，従来の史学に再検討を迫り，心理的な要因と奴隷制度の問題に新しい関心を呼び起こしたことは，評価されるべきである。(2)の主張者はほとんどいない。(3)の場合は，それがジェファスンの思想に大きな影響をもたらしたか否かでまた分かれるわけだが，大きな影響を与えたとすれば，情事の事実関係と，ジェファスンの思想の変化過程を追って，両者の対応を確定することが必要である。情事の相手が黒人奴隷ということになると，人種問題と奴隷制度がからまって，問題は複雑となる。さらに彼女は混血児であり，しかもジェファスンは混血を恐れながら自らそれを実践したことになる（「ヴァジニア覚え書」の執筆と出版の間に，Sally との接触が始まった）。南部奴隷制社会の中で，二人の関係は，はたして平等な人間同士の恋なのか，主人と奴隷という権力関係においてなのか，Sally は本当に幸福であったのか，子供たちは何を考えていたのか，その中でジェファスンは黒人観を変えていくのか，すべては依然として謎のままに残る。問題提起者としては，これらの謎に，単なる推理ではなく，客観的な事実の裏付けをもって答えるべきであろう。そのためには，当時の社会経済的背景の解明と，ジェファスンの思想構造の分析が一層重要となるであろうことは，言うまでもない。

——8月13日，Charlottesville, Virginia 大学にて——

（経済学部教授）

クラークソン著「前工業化イングランドの経済 1500–1750」（二）

第2章　変化を取りまく環境

L. A. Clarkson, The Pre-Industrial Economy in England, 1500-1750
(B. T. Batsford Ltd., London, 1971, pp. 268)

大貫　朝義
酒田　利夫

前工業化イングランドにおける生産の拡大は，市場の規模によって限定されていた。だがそれにも拘らず，経済のあらゆる部門で発展（アドヴァンシス）がみられた。実際，16世紀前期から18世紀前期の間に行われた発展（プログレス）を検討しつつ，それを革命的なものとして叙述している歴史家もいる。しかし，18世紀の産業革命とは異なって，それ以前の諸世紀に行われた生産方法や組織形態における発展は，経済構造を急速に変えはしなかった。前工業化イングランドで生じたような経済発展（プログレス）は，新しい需要パターンを開拓し新しい市場機会を追求する企業家層によってもたらされたものであった。全体としてみると，彼らの努力は，好適な資源配置，比較的安定的な政治機構，好適な社会構造によって助けられた。本章では，経済発展に対するこれらの非経済的要因を，主たる対象として取り挙げる。〔従って，経済発展の〕成果そのものについては，次章以降で考察されることになる。

地理と資源

イングランドは，経済発展の上で自然条件に大変恵まれていた。チューダー及びスチュアート朝期のイングランド人は，彼らの母国がエデンの園に較べても殆ど遜色ないものであると信じていた。ある熱烈な愛国者は，16世紀中葉の著作の中で，イングランドを「フランスを遙かに凌駕する多くの港湾を有する大洋に囲まれ」，「さまざまな好適な河川」を持つ国として叙述している。彼は，「イングランドにおける豊富な家畜，……雄牛，雌牛，豚，山羊その他。われわれはまた，世界中で最上の羊毛をもたらす羊を有している……。豊富な地下資源，……多くの金属類，石炭，石板と石」と書き記した。一世紀後に，ヘンリー・ベラシス Henry Belasyse はヨリ簡明に次のように記した。「イングランドは山，橋，泉，教会，婦人や羊毛で有名である」と。婦人は，「男達の同意により，ヨーロッパの中で最も美しく保たれて」いたために，経済発展（プログレス）にとっては恐らく気晴らしとなった。実際大変美しかったから，〔歴代の法王の中にあって〕ただイングランド人の法王のみが，彼女達は「彼女達の美しさが他の者の徳にとって悩ましい障害とならないように，ローマに巡礼に赴くことを許されるべきでない」と主張したのである。ベラシスはまた，混み入った隠喩の趣味のみならず，他の種の美しさへの眼識も備えていた。

> 「我が海の山なす魚，我が空の雲なす小鳥，凡ゆる平原は肉牛と畜牛とによって蔽われ，凡ゆる所に羊が群れなし，凡ゆる地域に森と狩猟地がひろがり，すべての森はジェントリのための獲物に富み，多くの石炭の鉱脈が地下に伸びて貧民に消費される。……イングランドの気候は大変温暖で，フランスにおけるように暑すぎることも寒すぎることもない。……周囲をとりまく海は夏には涼気をもたらし，冬には暖気を与えるので，そのために私達の鼻がたれることはあっても，ロシアにおけるように鼻〔そのもの〕が欠けてしまうということはない。」(1)

注（1）Tudor Economic Documents, ed. R. H. Tawney and E. Power, 1924, III, pp. 1–11; H. Belasyse, An English Traveler's First Curiosity: or the Knowledge of his own Country, 1657, in Hist. Mss. Comm., Various Collections, II, 1903, pp. 193–4.